

アモス書 5 書 18-24 節

テサロニケの信徒への手紙一 4 章 13-18 節

マタイによる福音書 25 章 1-13 節

先週は、ランチタイムコンサートがあり、たくさんの方々がパイプオルガンの調べに耳を傾けました。心温まるひと時でした。気温の方は、先週末から急に低くなり、秋を超えて冬のように寒くなりました。皆さまどうぞ体調にはお気を付けください。

本日は、「子どもと共に捧げる聖餐式」ですが、紙面では通常通り、福音書を中心にして学びたいと思います。本日の福音書はイエス様の天の国についてのたとえ話、花婿の到着を、灯を持って待つ10人のおとめのお話です。たとえ話は、本来伝えることが難しい事柄を、身近にあるわかりやすい何かに置き換えてわかりやすく語る、語りする方法ですが、イエス様の天国のたとえ話の場合は、必ずしもわかりやすいとは言えません。「**そこで、天の国は、十人のおとめがそれぞれ灯を持って、花婿を迎えに出て行くのに似ている**」(マタイ 25:1)とありますから、天国のたとえだとはわかります。しかし、たとえ話自体は、何を何にたとえているのか具体的に置き換えて、解釈する必要があります。

その置き換え方は、いろいろですが、一つの例として、「花婿」を「イエス様」、その「到着」を「世の終わり」、「婚宴」を「天の国」に入ること、迎える「おとめ」を「キリスト者」あるいは「人間」、「眠る」ことを「死」、「灯と油」を「信仰」と置き換えることができると思います。このように置き換えた場合、このたとえは、天の国(神の国)に入るためには、途中で消える灯のような信仰ではなく、最後まで光り続ける予備の油を伴った灯のような信仰が大切である、という教訓を語っていると解釈できます。そして、まことの賢さとは、そのような信仰を持つことであるということです。

このように解釈したとき、一つの疑問が起こります。イエス様は、そのような信仰でないと天国に入れないと、このたとえを通して教えたのかという問いです。この問いに答えることは、なかなか困難なのですが、わたしは、実際のイエス様がそのような趣旨で語ったとは思いません。しかし、このたとえを受けとめたマタイ福音書を読んでいる教会の人々は、自分たちの教会の信仰のあり方として、また一人ひとりの信仰のあり方として、そのように受け止めたのでしょう。

そのような受け止め方は、マタイ福音書の特徴とも関連します。すなわち、マタイ福音書は、イエス様の教えの最も大切な事柄を、イエス様が十字架で示した愛にも基づいて、律法を徹底的に実践すること、律法学者やファリサイ派の人々以上に実践することと考えていたからです。そして、そのことを実践する場を、教会という新しい交わりとしていました。それゆえ、マタイ

福音書を読んでいる教会の人々は、このたとえから、主なる神様に呼ばれ、教会に集められ、信仰を持ち続けるとは、それぐらいの真剣さをもって臨む事柄であると受け止めたのでしょう。まさに、灯として、主なる神様の愛と正義の実践を教会の行うことを通して、世界の光となることです。そして、その歩みは、世の終わりまで完成はない。だからこそ、今、輝いているので十分と考えるのではなく、いつでも光り続けられるように、すなわち、「賢いおとめたちは、それぞれの灯と一緒に、壺に油を入れて持っていた」（25：4）とある通り、予備の油を常に用意していくように考えなければならないと、このたとえを受け止めたのだと思います。

それでは、イエス様がこのたとえを通して伝えようとした事柄は、どのようなものなのでしょう。実は、こちらの方は、理解するのは困難なのです。実際、いつ誰に向かって、イエス様がこのたとえを離されたのかが、はっきりとはわからないからです。また、イエス様のご生涯全体から解釈する必要もあるとも思われます。もちろん、そうであるからこそ、マタイ福音書を読んでいる教会の人々は、先にみたとおりであると受け止めたのでしょう。イエス様がこのたとえを語った意図は、推測するしかないのですが、そもそも何のためにおとめたちが灯を持ってそこにいたのか、そこから考えてみたいと思います。

おとめたちがそこにいる理由は、明確です。暗くても安全に花婿を迎え入れるように光で照らすためです。油を分けられない理由もそこにあります。分けてしまえば、自分たちだけ10人全員は明るくなりますが、本来の目的である、花婿を迎えることができなくなります。それは、信仰に置き換えれば、主なる神様の愛を受けて信仰をもち、自分たちはみんな火が消えずによかったと、喜びに満たされたとしても、その信仰を通して、主なる神様を示すことをしなくなってしまうということです。

主なる神様を信じることを通して、そしてその人々の交わりを通して、光り輝くことは大切です。しかし、その光は、主なる神様を照らし出すものでなければなりません。それは常にイスラエルの使命であるといえます。教会も同じです。しかし、その光り方は、地上にあるほかの光と同じではないのです。ただし、そうであるがゆえに、過去も現在も、それがなかなか具体化されない現実もあります。また、主なる神様を示すために、他者を傷つけることが行われてしまう現実もあります。しかし、教会は、つねに教会ならではの、主なる神様を指し示す歩みを、生み出さなければならないのです。

教会の歩みは、それがどのような形であり、盛んになること、光り輝くことは大切です。戦いの中に地域でも、それを行うことはできます。そして、わたしたちの教会がそうであるように、平和の中にある地域にでも行われます。平和の中にあるからこそ、その光が、より明らかに主なる神様を示すものとなるように、これからも歩みたいと思います。